

講 演

戸田城聖と学生
—東大法華経研究会50周年記念—

篠原 誠

本日は、遠路、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

色々、勉強されている方には、今日、私がお話することは、「よく知っている」ということになるかも知れません。また、創価大学の新生の皆さんは、あまり聞いたことのない話かも知れません。よく知っていらっしゃる方は、もう一度、頭を整理していただき、それから大学生の諸君は、今日の話の契機にして今後、色々、勉強していただければよろしいのではないかと考えています。

創価教育研究センター主催の講演は、大体、1時間半ぐらいの内容になるのが普通ですが、私の場合は、簡略に申し上げたいと思います。創価大学は、色々な大学との交流がありますが、ある時、イギリスの大学の教授が来て話をした時に、「私は、大学で評判の良い教員なんです。その理由は、話が短いから、皆に喜ばれるんです」と言われていたのですが、なるほど、これはいいな、と真似するわけではないのですが……（笑）。

私は、昭和27年、東京大学の2年生の時に創価学会に入会いたしました。その翌年、昭和28年から30年にかけて、第二代会長の戸田城聖先生から、日蓮大聖人の仏法の奥義である「御義口伝」と「法華経」の勉強をしていただきました。その時から数えて、今年（2002年）で50年目ということになります。

最初から、その講義を受けたメンバーは4人おります。私も含めまして、全員が70歳を過ぎております。まだ、まだ皆、健在ではありますが、中国の杜甫が「人生七十年古来稀なり」と言って、そこから「古稀」という言葉が出来ましたように、70年生きている、ということ自体が“稀”なんです。そういうことから言いますと、その時、教わったことを、一人でも多くの方々に早目に伝えておかなければ、満50周年に当る来年はどうなっているか分からない、ということでもあります（笑）。

私が、皮切りとして、大綱をお話いたしますから、その後は、一緒に戸田先生から薫陶を受けた、渡部一郎（元衆院議員）、青木亨（創価学会副理事長）、森田康夫（参議会議長）の3氏にも、それぞれの話をしてもらえば、皆さんにも、非常に参考になるのではないかと、思っているわけでありまして。

獄中の“悟達”をもとに「法華経」を講義

戸田城聖先生が、軍国主義政府の弾圧で投獄されまして、その牢の中で不思議な体験をされたということは、よくご存知だと思います。その時の体験、悟りを元にして、昭和21年1月

1日から「第1期法華經講義」を開かれています。その内容は、戸田先生が書かれた『人間革命』（聖教文庫）、それから、池田大作先生が書かれた『人間革命』（同。既刊12巻）に詳しく出ている通りでございます。

最初の講義の際、4人の人が受講したということです。皆、昔からの仲間だったそうですけれども、戸田先生が、すらすらと「法華經」を講義されるのにびっくりして、「あなたはいつ法華經を勉強したのか」と質問したということです。それに対して、戸田先生は「勉強したんじゃない。牢の中で思い出したんだ」という風に返事されています。戸田先生は、「牢は不思議なんだ。あまり勉強はしていなかった。それで牢に入って苦勞して法華經を読んだんですけれど、ある時不思議な体験をして、それ以来、法華經が解るようになった。女房も不思議がって、“あなたにずっと付き添ってきたけれど、あなたが勉強したのを見たことがない”」と。急に『法華經講義』を始めたというので、奥さんがびっくりされた、というエピソードがあります。この、「私は思い出したんだ」と言われていることが重要なところです。

この第1期の「法華經講義」は、昭和21年の元旦から3月28日まで行われて、その4月からは、第2期が始まったことが記録されています。その翌年の昭和22年には、いよいよ池田先生が学会に入られます。そして、昭和23年9月13日から、翌24年の2月11日までの間に行なわれた、第7期の「法華經講義」を受けられたのです。

受講された池田先生は、戸田先生の講義に感銘を受けられ、日記に詩を書かれているんです。1995（平成7）年から98（同10）年にかけて、『大白蓮華』誌上に「法華經の智慧」が連載されましたけれども、あの最後のところに出ています。私が『大白蓮華』の編集長をやっていた当時の、昭和40年の4月号の『大白蓮華』に詳しく載っています。このことについては、また、いつか申し上げたいと思います。

戸田先生の「法華經講義」については、以上のような大きな流れがあるわけです。

「今此三界」の文に触れ、仏法に関心を持つ

その中で、いよいよ「東大法華經研究会」がスタートすることになります。

私どもが、昭和27年に東大の学生として、学会活動をしていた時に、戸田先生が、直々に「法華經講義」をして下さることになったのです。大変なことでありました。それは、昭和28年4月18日から始まっております。どうして、先生の講義を受けられるようになったか、という経緯について、少し、時間をさかのぼって申し上げたいと思います。

これは、私事になるのですが、私は、昭和6年生まれで、子供の頃は戦争ばかりの時代でありました。国と国は戦争しているのが当たり前だと思っておりました。中学2年の時に敗戦となって、その後、日本は乱れに乱れました。私は非常に悩んで、高校生ではありましたが、仏教とか西洋哲学の勉強を始めたのです。体が弱かったものですから、早く何かしつかりしたものを掴みたいと思い、真剣に、勉強をいたしておりました。

幸い、昭和26年に東大に入学しました。その頃、身体の状態は最低で、よく寝床の中で本を読んでいたのです。親父の本箱の中に仏教の本があつて、それを読んでいたら、「今此三界皆是我有 其中衆生 悉是吾子 而今此処 多諸患難 唯我一人 能為救護」（法華經譬喻品第三）という文にぶつかりました。「今此の三界は 皆是れ我が有なり 其の中の衆生は 悉く是れ我が子なり 而も今此の処は 諸の患難多し 唯我一人のみ 能く救護を為す」と読みます。

最初、よくは解らなかつたのですが、この「三界」は「世界」「宇宙」と考えていいでしょう。

「この世界は、全部、自分のものである」、「あらゆる人は、全部、自分の子供である」と釈迦

が言っているのです。そして、「しかも、その三界には、非常に不幸なことが多くて、皆、困っている。それを自分だけが救うことが出来る」と、釈迦が断言している非常に有名な文なのです。

それまで全然知らなかったのですが、たまたまその文を読み、「凄いことが書いてあるな」と思いました。それまで、そういう確信ある言葉に出会ったことがなかったからです。色々な宗教とか哲学の本を読んでも、「こうではないだろうか」とか「こうも考えられる」と、皆、あいまいなことしか言っていない。ところが、釈迦は「自分は、一切衆生を救う」と断言しているのです。これは凄いことだ、こんなことを言う人はいない。“仏教”なんて如何にも古臭い話みたいに使われているけれども、奥の奥に何かがあるのではないか。そこで、「じゃあ、自分も本当の仏教を探求してみよう」と思ったわけです。これが大学1年の春のことです。しかし、どのように学んだらいいのか、全然、分からない。少なくとも、坊主ではない人から、仏教を教わろうと思っていたわけですが、それも、誰から教わっていいか分からない。

たまたま私の小学校以来の友人で、中央大学の学生がおりました。機会があれば、遊びに行って色々話をする仲でしたが、「僕は、最近、仏教の勉強を始めたんだ」と言うと、「それはちょうどよい」と言うのです。彼自身は、仏教に対する関心なんか、全然ないのですけれども、通っている中央大学の英語の講師で、大変に面白い先生がいる、と教えてくれたのです。神尾武雄（後に、創価大学文学部教授）という先生でしたけれども、英語の授業を早く終わって、最後に、「法華経」の話をする、と言うのです。一生懸命、「法華経」の話をして、現在、世の中で色々起きている現象というものは、二千数百年前の「法華経」に全部書かれ、予言されている、と言っているという。その友人は、「先生の話は凄い勢いだから、皆、笑って聞いているけれども、君も1回聞きに行ったらいいよ」と勧めてくれたのです。

しかし、私は、中央大学の学生ではありませんから、授業に行くわけにもいきません。結局、その先生の家に行ってみよう、ということになりました。友人には“連絡とってくれよ”と頼んでいたのですが、なかなかやってくれない。そのうちに、秋が過ぎ去っていったのです。

学生4人で「東大法華経研究会」を結成

やがて秋が深まり、初冬に入った12月になって、東大の教養学部の掲示板に『「仏教研究会」を作ろう』という掲示が出たんです。それを目にした時、感心いたしました。その頃は、戦争に負けて、神道も、仏教も、儒教も全部ダメで、これからはキリスト教かマルキズムもしくは実存主義しかないのだという風潮だったのです。そういう中で「仏教研究会を作ろう」というのですから、びっくりいたしました。「奇特な人がいるもんだな。一緒にやろう」と思って会ったのが、渡部一郎という人物だったのです。

しかし、2人だけでは「部」は出来ない。当時の東大教養学部では、学生4人、それに教員1人で「クラブ」が成立したのです。そこで学生を集めて4人になり、教員も来てくれました。その教員も変わった人として、「私が、法華経の講義をしてあげよう」と言うのです。クラブの名称についても、「仏教研究会」ではなく、もっとはっきり「法華経研究会」にしたらどうだ、と提案したのです。「そうですか、はい」と言って、結局、「法華経研究会」というのが出来上がったわけです。そして、何か怪しいな、危ないな、と思ったのですが、その先生を中心に、月に1回くらい勉強することになったんです。

そのうちに、先程述べた中央大学の友人が、神尾先生のお宅に連絡を取りに行ってくれて、3月になって1人でご自宅を訪問いたしました。神尾先生は、私を見て、非常に変わった人間

が来たな、と思われたようです。最初、「何を求めているのか」と聞かれたので、「本当の仏教を知りたい」と言うと、「これが本当の仏教だ」とばかり様々なことを教わりました。「仏教は“生命が永遠だ”ということに基づいている。そのことを勉強しなさい。戸田城聖という凄いい先生がいらして、その方だけが本当の仏教についての講義が出来るのだ」とも言われました。

「君は、何か一生懸命勉強していると言うけれども、勝手なことをしてはいけない」とも。私は、そのころサンスクリット語を学んでいたのです。梵語です。梵語をやって「法華経」を読もうかな、と思って勉強していたのですが、それについても、神尾先生は「止めなさい。勝手に読んだら破滅する」と言うのです。「過去の歴史においても、『法華経』を読み誤って、破滅した人は非常に多いのです」と指摘されたので、それ以来、梵語を学ぶことは、ぴたっと止めてしまいました。それで、日蓮仏法以外には“本当の仏教”はないのか、ということで、2週間ほど更に話を聞き、昭和27年4月3日に創価学会に入会いたしました。

その頃のすることについては、後に池田先生が「君たちのことも書いて上げるよ」と、『人間革命』の第8巻「学徒」の章に詳しく書いていただいております。

多忙な戸田先生が、直々に講義される

入会をして、仏法の勉強だけしていればいいのかと思っていましたら、創価学会は、折伏の団体である、ということで、折伏の進行に加わりました。まず私が渡部一郎さんを折伏し、入会させて、渡部一郎さんが青木亨さんを折伏して、次に、森田康夫さんが入会しました。そして、半年くらいの間に、東大生の学会員が10人ぐらいに拡大していきました。当時としては、大変、珍しい現象だと言われました。学会内の大学生は、まだ少なく、ましてや、東大生は理屈っぽくて、なかなか信心などしなかったからです。その頃の学会は、まだ、全部で1万世帯くらいの時代ですから、東大生の相次ぐ入会という出来事は、直ぐに話題になったようです。

そのことを戸田先生が聞かれまして、「『法華経』を勉強している、というではないか。それならば、私が直接教えてあげよう。」と言われたのです。先程もお話いたしましたように、「法華経」を勝手に読むと、読み誤って罰を受けてしまう、ということについては、戸田先生の「創価学会の歴史と確信」という論文に書かれています。その経験から、ただ法華経を読むのではなく、大聖人の「御義口伝」をもとにして「法華経」を読むのだ、と教えられました。そして、「来年からやってあげよう」ということで、お忙しい戸田会長が、わずかな東大生を相手に、昭和28年4月18日から講義をやって下さったのです。

戸田先生を囲んで勉強会が始まる前に、我々は教材となる「御義口伝」を見てびっくりしたわけです。「御書」は買ってはいたのですが、読むことが出来ない。第一、「御義口伝」という言葉すら読めない。「どう読むんだ？ごぎくでんか？」「おんぎこうでんか？」とか言っていて、「おんぎくでん」と読んだ人は一人もいなかった（笑）。それくらいレベルは低かった（笑）。入信して、まだ1年くらいですからね。

そこで、渡部さんが代表して、戸田先生に、「もっと易しいものを、やっていただけませんか？」と言いに行った。ずいぶん大胆な話ですけどね（笑）。すると、戸田先生は笑って、「御書は日本語で書いてある。小学生でも読めるんだ。君たちは読めないのか。東大生って威張ってるけれど」と、こういう風に言われた（笑）。それで「御義口伝」の勉強会が開始されたわけです。

第1回目は、市ヶ谷の本部分室で行なわれました。当時、本部は、千代田区の西神田、水道橋から行った所の「日本正学館」の2階にありました。昭和28年秋になって、初めて学会本部

が信濃町に出来るわけですが、それまでは、戸田先生は、ご自身の職場であった市ヶ谷ビルの一室を「本部分室」と言われていました。その分室や本部において、昭和30年まで月1回ぐらいのペースで講義をして下さいました。

池田先生は、その頃は、青年部の最高幹部であり、お仕事も大変お忙しくて、その勉強会には一緒に参加されることはありませんでした。しかし、活動や仕事が終わってから、勉強会の終わり頃になってよくお見えになり、「戸田先生から、講義を受けられるのは、大変なことだよ」と、何回も激励を受けたことがございました。

当時、戸田先生は、大変、お忙しかったのですが、我々は学生だったこともあり、そのことが分からなかった。後になって、創価学会が『牧口常三郎・戸田城聖年譜』を制作いたしました。私も、少々そのお手伝いさせていただいたのですが、戸田先生の一、二日は、大変、お忙しかったんだな、ということ、改めて知りました。私たち学生は、夕方に研究会に出席し、それだけで帰ってしまう。しかし、「年譜」を読んで分かったことですが、戸田先生は研究会を終えた後も、豊島公会堂で一般講義をやっておられる。しかも、翌日は、大阪で講義をされている。どうやって移動されたのか、未だに分からない。夜行列車か飛行機なのでしょうが、誰に聞いても分からない。むしろ新幹線はありませんでしたから、その頃、大阪までは8時間、名古屋までも6時間ほどかかったのでしょうか。夜の一般講義が終わって、翌日の昼間には、もう大阪で行動を開始されている。それほどお忙しかったのに、我々、わずかな学生のために時間を割いて、2年以上も講義を続けていただいたのは、本当にありがたいことだったな、と深く感謝しております。

研究会ではまず学生が「法華経」を読み、解釈し、「御義口伝」を読み、解釈し、後は、戸田先生の深いお話を聞く、というやり方で進められました。その後は、「何でも聞きなさい」ということで、色々質問しました。難しいことを聞かれて、きちっと答えられる人は、戸田先生と池田先生しかいなかった。他の人は、ある程度のことしか分からない。しかし、こちらは私が哲学科で、渡部さん等は工学部で、応用化学が専門でしたが、色々なことを伺っても、先生は全部、明快に答えて下さった。有難いことです。

戸田先生の御書講義は、一般講義や、方便品・寿量品講義では豪放磊落な語り口で、皆を笑わせ、面白くやられました。ところが我々、学生に対しては、本当にきちっと厳密に論理性をもって教えて下さったのです。

そういった丁寧な質疑応答をやっていると、なかなか前に進まないわけです。1年経っても「法華経」の「序品」から出て行かない。それでまた、渡部さんが、せっかちですから(笑)、「先生、この調子だと何時になったら終わるかわかりません」と言ったんです。すると、戸田先生は笑って「釈迦だって『法華経』を説くのに8年かかっている。最後までやらなくてもいいんだ。たった1箇所でもいいから、本当に分かれば、後は、自分で読めるようになる」と言われたのです。「同じ深さで、ずっと読めればいいんだよ」とも言われました。仏法というのは深くやった方がいい、ということは、池田先生が御書講義される時にも、そう言われています。たくさん読んだ方がいいのかもしれませんが、深く読むということが大事なのですね。

学生たちの心に残る指導の数々

勉強会での内容はどうだったか。たくさん教えがありましたけれど、強く印象に残っていることをいくつか申し上げます。

一番最初に言われたことは、『法華経』は、何が書いてあるのか、誰にも分からない。皆、

迷っている。実は『法華經』には御本尊のお姿が書いてあるんだよ」ということでした。それが一番最初の話だったので、印象深く覚えております。戸田先生が牢の中で題目をあげながら法華經を読み切られた時、御本尊の姿はかくあるはずだと考えられましたが、後に帰宅なさって御本尊を拝された時に、そのお考えが合っていたことが証せられたそうです。

その次に、「皆、南無妙法蓮華經って何だ、と疑問に思うだろう。南無妙法蓮華經については、色々な説き方が出来るかも知れないけれど、君たちに分かり易く言えば、生命を変化させる大本なんだよ」と言われました。「生命は絶えず変化しているだろう。全然動いていないようだけれども、実際は、絶えず変化している。我々が“年を取りたくない”と言って、安楽椅子にじっと座っていても、刻々と年は取る。何かやっても年は取る。着々と人間は年を取る。動物だって年を取るし、色々な物体だって変化し、やがて壊れていく。その変化させている原動力おおもとというか大本を、日蓮大聖人は『南無妙法蓮華經』と名付けられたんだ」と、大変分かり易く話をされました。「だから、題目を上げることで、変化の大本を取り入れることになるんだよ。もっとはっきり言えば、取り入れなくても、我々は、元々、南無妙法蓮華經の当体なんだよ。題目を唱えることによって、変化の大本を動かしていくから願いが叶うんだ。願いが叶うのは当然なんだ」と言っておられました。

3番目に「我々の生命は宇宙生命の一部なのである」（心臓が体の一部であるように）といわれました。祈りが叶うのも、このことと関係がある。また一つの生命が、遠方の他の特定の生命に影響を与えること（テレパシー）は、世間一般の生活でも、その力が極めて強い時は起こりうる。しかして、この働きを確実にするのが御本尊なのであるということでした。

4番目に、日蓮大聖人は、16歳の時に、すでに“悟り”があった、と言われているのです。これは大事なことです。清澄寺で研鑽され、鎌倉へ行かれて勉強し、後に、比叡山で勉強されるなど、あちこちに遊学されています。しかし、その勉学の結果、やっと「法華經」は凄い經文だ、とか、南無妙法蓮華經を唱えればいいのだ、と悟ったわけではない。十六歳の時に、すでに妙法に目覚められている。それで自分の悟りを証明なさるために、ずっとあちこちに行つて勉強された、と言うのです。なるほどな、と思います。

釈尊の法門は、一口に「八万法蔵」と言いますが、物凄い数の經文を片っ端から読んでいって、それで分かるという人はいないのではないのでしょうか。最初に悟りがあってこそ、初めて重要な文証が飛び込んでくる。「御書」を読んでいて感じられるでしょう。どうして、たくさんの經文の中から、必要な文証だけぽんぽんと出てくるんだろう、と。結局、大聖人は全てを分かった上で読んでいらっしゃるから、重要な文証だけが目につく。そういうことを、戸田先生は言っておられました。

これは昭和32年の「年頭の言葉」というのがありますが、そこに出ております。池田先生は『大白蓮華』の平成14年2月号の「御書の世界」で、大聖人は「御自身の悟りをもとに仏典を求め、鎌倉や比叡山などに修学されます」と、『大白蓮華』の2月号を読み返していただければわかります。戸田先生と全く同じことを、池田先生が言っておられます。重要なことです。

先程、申し上げたように、戸田先生ご自身が、牢中での悟りを元に、法華經を講義された、というお話もありました。先生は、「私は、決して字引を引いたり、参考書を読んで講義出来るようになったのではないんだよ」と言われ、「不思議な体験をして、それ以来、法華經も、御書もすらすらと読めるようになった」とおっしゃっています。これが仏法の不思議なところですよ。

生活指導原理としての価値論

あとは「価値論」と「青年と職業」について、一言申し上げておきます。これは、特に、学生諸君に申し上げておきたいと思う。創価学会の初代会長、牧口常三郎先生の「価値論」を勉強すれば分かることですが、カントが「価値」を「真・善・美」としたのに対して、牧口先生は「美・利・善」と立てられた。短期間の価値というか「美」、それから得という意味での「利」、それから世の中のためになる「善」、この「美・利・善」こそが牧口先生の「価値論」の骨格でしょう。「美」にとらわれて「利」を考えない、損得を考えない人間は愚かだ、ということになります。それから「これは自分のために得だ」と思うものでも、それが人のためにならないことになれば、それは悪になります。例えば、麻薬を取り引すれば儲かる。人のためにならないことをやっても自分は得をする。しかし、それは悪人ではないですか？

牧口先生の「価値論」は「美・利・善」と対比的に言われているけれども、戸田先生は、さらに、それを進められたんですね。今日、残っている「価値論」というのは、牧口先生の「価値論」に、戸田先生が、さらに集大成されたものなのです。『牧口常三郎全集』にも「戸田先生が補訂された『価値論』」と書いてある通りです。

その「価値論」と「青年と職業」ということですが、青年は、なかなか自分の思い通りの職業につけない場合が多いのです。自分は理科系の勉強をやったから、理科系の職業につきたいとか、美術を学んだから美術関係の職業につきたい、などと考えるわけです。しかし、受け入れ側の都合がありますから、なかなか就職も出来ないわけです。従って、学生は卒業する段階で、色々、迷うことになります。

しかし、何でもいいのです。何でもいい、と言うと語弊がありますが、とにかく目前の仕事を一生懸命やる、ということが大事です。職業として立派なことであれば、何でも一生懸命やることです。戸田先生は、信心している場合には、だんだん「美」の価値を持ち、「利」の価値があり、しかも、人のためになる、つまり「美・利・善」が一致した職業、立場に、最後は行くよ、という話をされていました。

『美』と『利』と『善』とが、それぞれ対立するという考えではなくて、信心していれば、ある段階まで行くと、『美』であり、『利』であり、しかも、それが『善』であるような職業、立場に行く。だから、若者は、いい思いばかりしようとしなくて、与えられたことを一生懸命やりなさい。好きなものばかりやっても、人間は大きく育たない。色々やった上で、様々な経験を積んだ上で、ある立場になれば、最後は、それまでやったこと全部が生きてくるよ」と教えられました。これは戸田先生ご自身の体験に基づく信念であったと思います。そうした薫陶を受け、我々も勇んで社会に飛び出して行ったのです。

戸田先生から講義を受けた四人は、その後、どうなったか？ 私とか青木さん、森田さんは、皆、副会長になりました。今、私は参議ですけれども、青木さんが副理事長となり、森田さんが参議会の議長になりました。渡部さんをご存知のように、長く公明党の代議士を務めて、今では国連関係の仕事をされています。

この最初の4人について言えば、本当に不思議なことに、皆、創価学会の学生部長として活躍することになります。渡部さんが第2代目、私が第4代、森田さんが第5代の学生部長に就任しています。青木さんは、学生部長ではありませんが、総合学生部長をやっているのです。それから師範会議議長という立場について言えば、私が第2代をやった、その次に森田さんが第3代、それから青木さんが第4代になりました。このように皆が順々にやっているのです。別に決まりがあるわけではないのですけれども、不思議だと言うか、眷属だなと思っております。

仏法のエッセンスの集大成、「法華經の智慧」「御書の世界」

「東大法華經研究会」はその後どうなったか。消滅してしまうのではなく、ますます発展していくのです。最初は、東大生だけだったわけですがけれども、昭和30年になりますと、他の大学生からの強い要望もあって拡大され、大勢が入って参りました。最後は、「東大法華經研究会」ではなく、創価学会の「法華經研究会」となっていき、その大学生を基盤として、昭和32年6月、創価学会学生部の結成となるのです。

その後、いよいよ池田会長の時代となり、先生は昭和37年8月31日から学生部に対して「御義口伝」の講義を開始されました。その経緯については、『新・人間革命』の第6巻に記されております。同時に『東大法華經研究会』を、もう1回、作って上げよう」ということで、「新・東大法華經研究会」を38年頃から、第1期、第2期と作って下さいました。その訓練の中から、また、新たな人材が輩出されたことは、皆さんもご存知の通りです。

池田先生は「広宣流布は、流れる布と書く」と、よく言われます。「流れる布」ということは、ずっと続かなくてはいけない、ということだと思います。戸田先生が、たった四人の大学生を相手に講義された歴史を、さらに発展させるべく、今後も素晴らしい流れを作っていかなければならないと思っています。

最後に、1995（平成7）年から98（同10）年に掛けて、池田先生は『大白蓮華』に「法華經の智慧」を連載して下さいました。これは仏法のエッセンスを書かれたもので、盛んに今、勉強されています。釈尊は人生の総仕上げに「法華經」を説きました。日蓮大聖人は、その「法華經」をテキストとして、晩年の弘安年代に「御義口伝」を述べられました。そして、戸田先生は、「法華經」を「御義口伝」を元にして講義をされ、我々も、その一端を伺いました。そうした長い積み重ねを踏まえ、それまでの一切を含めて、今日、池田先生の「法華經の智慧」、また、現在、『大白蓮華』に連載中の「御書の世界」があるのです。今、私がお話したことは、単なる過去の歴史ではありません。ずっと流れが続いて、どんどん水嵩を増し、ますます内容が深くなっていく中で、池田先生が集大成されて「法華經の智慧」と「御書の世界」で説いて下さっているわけですから、これらをしっかり勉強すれば、仏法のエッセンスを全部、勉強出来ることになるということです。

今日の私の拙い話が、「法華經の智慧」とか「御書の世界」の研鑽の手懸りとなれば幸いだと思っております。以上でございます。